

クレメント・グリーンバーグのモダニズムに関する主張を教科書的に単純化した場合、モダニズムとは自己批判による自己純化のプロセスである。これは絵画で言えば平面性へと自己を還元していくプロセスである。また、20世紀に生まれた絵画がこのようなプロセスを経たとすれば、これは具象絵画から抽象絵画への展開として捉えられる。しかし、絵画について考える場合にわれわれが用いるこの「具象的 (representational)」と「抽象的 (abstract)」というカテゴリーは、モダニズムを把握するうえで十分なカテゴリーだろうか。本研究発表の意義は、これらふたつの絵画の基本カテゴリーに加えて、「形象的 (figural)」というカテゴリーの重要性を説くことにある。モダニズムが自己批判による自己純化のプロセスであるならば、従来の「具象的」、「抽象的」という対立項に加えて、「言説的 (discursive)」と「形象的」という対立項を導入する必要があるというのが発表者の主張である。なぜなら絵画の自己純化とは、絵画における言説的なもの＝物語的要素の批判でもあるからだ。つまりモダニズム絵画の展開は、読めるものとしての言説的なものの消失の歴史である。しかし、それに反比例して増加する見えるものとしての形象的なものとは一体何か。これは見た目ほど簡単な問題ではない。一般に絵画を構成する線や色や筆触を、「赤い」や「粗い」という形容詞でもって表現し、さらにその構成を接続詞でもって表現するならば、抽象表現主義のような筆触にしても、言説的なものを逃れていないと思われるからだ。

この問題を考えるうえで、われわれは J=F・リオタールの『言説、形象』(1971) を理論的な土台に据える。彼が考える「形象 (figure)」とは、同一的な言語的意義と、ゲシュタルト的安定化を常に逃れさせる「差異」のことである。彼が「形象」という概念で指示しているものは、単なる具象的な図像ではない。それはゲシュタルトが不安定であることによって、自らの輪郭線を常に自己脱構築しながら、言語的な意義の同一性を逃れさせる「見えるもの」である。また、このように定義される「形象」の存在を認めるならば、モダニズム絵画は平面的であるとか抽象的であるだけでなく、形象的でなければならない。というのも、平面的、抽象的というカテゴリーが、絵画に対する「赤い」や「粗い」といった言説的なものの認識を許す限りで、それらは自己純化の徹底の十分条件ではないからだ。

本発表では、上で述べた『言説、形象』の議論に加え、西洋美術の歴史を言説的なものの支配から形象的なものの解放の歴史として読むノーマン・ブライソンの「言説、形象」の議論や、リオタールの形象論のモダニズム絵画への応用であるロザリンド・クラウスの「見る衝動／見させるパルス」を参考にする。